



本書は

「寵愛Ⅰ 魔の花嫁へ堕ちる者」

「寵愛Ⅱ 苗床寵姫」

「寵愛Ⅰ・Ⅱ再録―悦楽収集本―」のかきおろし短編小説をまとめたものです。

本書は成人向けです。十八歳未満の方の目に触れないよう、お願いいたします。

この小説の著作権は「サークル・焼肉文庫 作者・カルビ」にあります。

無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載は禁止です。



もくじ

1話 蕙いのひととき

2話 蜂蜜寵姫

3話 一夜辱、光は堕ちて

一刻 狂乱の肛悦初夜

二刻 真夜中の牝尻絶頂

三刻 明けぬ淫獄、永遠の淫夜

3

28

50

76

100

憩いのひととき

神々とそれを奉る人間たちの世は終わり、いまや魔物が文明を回していた。世界を支配する魔王城内は日々誰もが忙しく働き、特に魔王は多忙を極めている。今日も朝からずつと執務室に居座り続け、机から一步も動くことなく書類を片付けていた。

「……………」

利き手は書類にサインを綴りながら、左手の喉を擦る魔王。一度、呼鈴に手を伸ばすが躊躇し、呼鈴の隣にある時計を手に取りタイマーを弄った。それからもう一度呼鈴に手を伸ばす。

チリン。チリン。

魔王は机に置かれている呼鈴を鳴らした。すると控えめに扉をノックする音「入れ」と言えば一人のメイドが入って来た。白黒を基調としたメイド服の色合いよりも鮮烈に赤い首輪と灰色の鎖が最初に目を引く。次にブラウスに押し込められた胸だ。いまにも釦が弾けてしまいそうなほど窮屈そうだ。

「……ご用は」

「喉が渴いた」

魔王が手にしたグラス。それを見てメイドは顔を赤らめ涙目になりながらも、椅子に座る魔王の傍へ近づいてブラウスの釦を外していく。

このメイドの名はブラン。かつて人類を魔の手から守るため神に選ばれし神々の加護を授かった聖者だったが、神々すら殺した魔王に囚われた。

聖者ブランは死ぬこともできず、男でありながら女性のような胸を持たされ、子種を奪われ母乳を射精する淫らな改造を敗北の烙印代わりにつけられ、魔王に奉仕する性奴隷として飼われている。

「魔王様ど、どうぞ……ご堪能下さいませ」

押さえつけるものがない胸は、赤い首輪よりも強烈に存在を主張する。健康的な肌の色と張り、生娘のような淡い桃色の乳首は天井へ顔をあげ、芯でも入っているよう硬く勃起していた。

巨桃を強調させるため腕で胸を押し上げ、柔肌を魔王へ差し出す。魔王の視線だけで淡い桃色の乳芽は硬くなり、乳頭から白い雫がしみだしてくる。

「ン……くうう……」

顔を真っ赤にさせながらそっぽを向くが、首輪から伸びる鎖を引っ張られ強制的に魔王と視線が交わる。

魔王の片手が右の乳袋を掴み、牛の乳搾りの要領でたわわな胸を弄ぶ。

「あ、くう……ふああっ……♡」

唇を噛みしるが甘い声が漏れてしまうブラン。隠す様子もなく股間を擦り合わせ腰を揺らす。

ブシュ、ブツブシュルルル。乳芽から母乳が溢れだし杯のなかへ落ちていく。ビュービューと勢いよく噴き出す母乳の射精快感にブランの足はガクガクと震え、膝を打ち付け合う。触れられていない左の乳芽から勝手にミルクが滲みだし執務室へ甘い芳香を漂わせる。

「まさしく牝牛よ」

「うふあ、あっひ……いやら、いやらあ……」

侮蔑の言葉にこらえきれず涙で視界が歪む。しかし罵られてさらに股間を摺り寄せる動きが激しくなった。

そんなメイドを一瞥し、グラスが一杯になると乳房から手を放して魔王は一気にミルクを飲み干した。

「……足りんな」

魔王は右手で机の引き出しを開ける。そこには様々な性玩具があった。引き出しに入っていたローターへ手を伸ばし、乳頭へ押しつける。

「あああ……これ、やだ、いやだあ……」

「嫌だ？ 好きの間違いであろう？」

青ざめるブランを鼻で笑い、右側の乳頭へローターをググつと押し込む。

チュツプ。奇妙な音をたてながら玩具は簡単に乳管へ沈み、胸からピンクの紐が伸びている。魔王がスイッチを入れればローターは、唸らせながら乳管のなかで甘美な振動を与えます。

「ふぎいいいいいいいい、ひいっ♡♡♡ お、おっぱいれえいく、いつひやうううううう♡♡♡」

ブブブウウ。ブルン！ ブルン！

内部で暴れるローターに操られ、乳袋も激しくうねり動く。敏感に調教されきった乳腺



は奴隷メイドを甦るための枷がついており、右足首を枷で固定されてしまう。

「次は左足だ」

「っはぁいい」

左足もひじ掛けへ乗つけて枷で固定される。両手はそれぞれ左右の胸を下から掬い上げた姿勢をとれと命令された。

魔王のすぐ眼上で涙目のメイドが自ら主張し見せつける胸から、ローターの線を伸ばし豊満な桃がダイナミックに踊っている。

「絶景、絶景よな。牝牛の巨大乳房がこうも派手に舞い踊れば中々、眼福よ」

「う、うう……お気に召して、いただき、光栄、です……」

真っ赤に涙ぐみ俯くるメイド。それが気に喰わないのか、魔王は引き出しから野太いデイドルを掴み取り、乱暴にアヌスヘデイドルが押し込める。大きなデイドルをブランの腸肉はなんなく呑みこみ奥まで玩具を受け入れた。

ズヂュウブズッ!!

「っ?! つくひいいいいい! つおほ!」

「いつまで無垢な聖者ぶるのだ貴様は、とつくに堕ちた牝牛だといつになったら自覚する」

ズブ、ズブグヂュ！ 不安定な足場の真下の肉杭打ちに足がガクガクと痙攣し、いつそ胸が激しいダンスを踊る。梁型が一センチ挿入されるたびに秘部からはダラダラと汁が漏れ零れ、椅子へ染みをつくりだす。デイドルが入りきると魔王は玩具のスイッチを最初から最大出力で入れた。

ヴヴヴヴィイイイ！ 玩具が高速回転で肉壺を抉りだす。

「ふぁひいふおっおっほっ、らめええいつひやう、いつひやううううう」❤️❤️❤️

ガクガクビクビクウウウ！ 体全体を上下に振り長髪とスカートがぶるんぶるんと跳ねまわる胸と同じぐらい激しい動きを見せつける。

蟹股のスカート内部は股間からの汁でどろどろ。肛門皺の隙間からはプリュプリュと半固形の直腸粘液が無限に溢れつづけ甘酸っぱい雌臭を振りまいた。

「おっぱいもおしりもおおらめええええいぐいぐうううううう」❤️❤️❤️

「これでこそ牝牛聖者。ではその牝牛の恥知らずなミルクを頂くとするか」

乱れ狂うブランの股間、スカートを突き破らんばかりに勃起した花芯に目を向ける魔王。激しく動くブランのスカートからチラチラと覗き見える陰茎は、いつ射精してもおかしくないほど勃起しており、尿道からミルクがわずかに漏れていた。

ジュル！ ジュルルル！ ジュルルルウツル！！

魔王がスカートを捲り、勃起花芯を咥えジュルリと吸い上げる。肉厚な舌に包まれながら鋭利な牙が甘く過敏な肉棒に噛まれた。

「つふつひいいいぎゆうほお、お、おおおおんん♥ ご、ごりえ、らめ、らびえらに  
よほおおおお♥ お、おち×ほみるきゆちよくへふゆすつちやあつ♥ あひいつほおお  
ほおおおお♥♥♥」

ブランは折れ曲がりそうなほど背が弓なりに反りかえり、白目を剥いて泣き叫ぶ。

「ジュル、ジュルル！ もつとだ、もつとだせ、俺は喉が渴いて仕方ないのだ」

ジュパジュパツチュル！ チュパツチュパツパ！

花芯から大量に溢れるミルクに魔王は舌鼓をうち、喉を鳴らしてどんどん吸い上げていく。まるで直接サーバーに口をつけて飲む魔王。ブランの花芯へ牙を突きたて噛みつき尿道へ舌を振じり込む。

「いぎゆ、いっぎゆ、いぎゆっうううううう！！」

どっぶどっぶどっぶぶっりゅううううううううう！！

自分の胸に爪をたてながら、ブランは魔王の喉元へ亀頭を押しつけ射精する。ブルブル

と背を震わせ恍惚そうに呆け、涎を垂らしながら呼吸する。

「はあ……ああ……もうらめえ……」

「ぬかせ」

ズブズブチュッチュッチュ!! 魔王の左手一指し指が、玩具が埋まったままのアヌスへ人差し指を追加した。

「~~~~~っほおおおん♥♥♥」

いきなりの指挿入にブランは腰が砕け白目から涙を零した。排泄器官を圧迫する異物を腸壁は体液を分泌させながら思い切り絞めつける。回転するデイドルとは違い前後にピストンを繰り返す。

「我はまだ渴いていると言っているだろ!」

「ふぎいい、ひっ、ひいいいいい! もうれないいいいいい! れまへええんううう!」  
奴隷メイドの悲鳴など無視して魔王は玩具と指の二輪挿しをやめない。

グジュブジュズヂュヌヂュブジュブジュ。

魔王の硬い指が前立腺周囲の淫肉を擦ると、腰に甘ったるい倦怠感を覚えすぐさま熱が疼きだす。海綿体に血が集まりスカートにテントを張ってしまう。

「倒すべきだった相手にこうも好き勝手されてヨがるのか、貴様は」

「ほ、ほへ♥♥ ほひ♥♥」

「イケ、イってしまえ」

「イグ、イク、イグイクイグイグイグイグううううう♥♥♥♥ 魔王しゃまの指ピストンリ  
えイギまぐりまひゅううう♥♥♥♥」

魔王からの嘲笑にブランはゾゾゾッと被虐の震えが走り、踊り狂う乳首がさらに勃起して  
しまう。花芯へ吸い付く口も牙が硬い肉棒を無遠慮に甘噛みして腸壺を掻き回す指が三  
本になり出鱈目にピストンを繰り返す。

ゴリゴリィ！ トドメの一撃で前立腺を押し潰される。ブランの脳内に火花が散り、目  
の裏がチカチカと点滅を繰り返してやがて視界は白一色に染まった。

「あ、あひ、ひいひいミルクザーメンらしまひゅうううう!! おおほおおおお♥♥♥♥  
お、おっぱいもお尻もイクのとまりやないひいひいひいひい♥♥♥ オチ×ポ母乳ピュ  
ービュー漏らしていきゅうううう♥♥♥♥ んあああいぐ、いぐいぐいぐうううう！ 牝牛  
母乳アクメきめまひゅううう♥♥♥♥ いぐいぐいぐうううういぐのどまらびいい  
いいいいいい♥♥♥♥ ま、まおうひやませんよう、みるきゅサーバードまらなびいい

いいい」

ジョボ、ジョボジョボジョボジョボ!! 尿道から母乳が漏れだした。精液よりも粘度のないミルクは全て魔王の喉へ流れ込んでいく。乳房から溢れる母乳がスプリンクラーのよう霧状に執務室へ飛び散る。

ひじ掛けの枷が外され、蟹股開脚から椅子に座る魔王の体に密着する姿勢になった。

グニ、グニユ、グチュ。魔王の鍍じみた亀頭が玩具を挿入したままの菊皺を捏ね回す。

「ふあ?! あっああっ!」

「どうした?」

「ま、まっへ、入ってる、入ってますのお」

「だからどうした」

「魔王様の遅しいのと、玩具いっしょならなんれ、く、狂っちゃう……わらくひ、狂ってしまいまひゅ……お、お慈悲を……」

「不様に鳴けよ」

熟れた大尻を鷲掴みされながら雄棒が腸壺を一直線に貫いた。ゴリゴリと玩具と肉棒がぶつかり合う。肉棒串刺しにされた勢いで目が反転し、花芯からはミルクがジョロジョロ

と溢れメイド服を汚してしまおう。

ズブズヂュグヂュヌヂュブヂュウウウウウウウウ!!

「—— おごぼおおおぎよっほおおおへええあひいひいひいひいひい♥♥♥♥♥」

「おうおう、腹に俺の形が浮いてるぞ、いやこれは玩具のほうかもな」

デイドルは挿入されたままひたすら回転し腸壁を愛撫し、肉棒は不規則に腰を動かしながらピストンを繰り返す。指とは比べ物にならない圧迫感と拡張感。

ブブヴヴィイイブイイイイイ!! 不意打ちできた最大出力のローター乳責め。牡棒のよう乳管内部を滅茶苦茶に摩擦し擦り回し、それに歓喜でもしている胸がぶるんぶるんと汗と母乳を撒き散らしながら跳ね回る。

「アツツキャヒイイイ、おおっばイらびゅえええええ♥♥♥♥」

パン！ パン！ パン！ 肉棒が擦り抜けるたびに肛門皺が捲れかえり、半固形の直腸体液が椅子へ糸を引きながら落ちていく。

「おごほおほおおおお♥♥♥♥ お、おひり、おひりいほじほじいひい♥♥♥♥ い、いのおおお、ブランはいっぴょう、魔王様のマゾ牛奴隷としてえご奉仕させてい、いひやらきまひゅううう♥♥♥♥」



お、ザーメンタンクなりなぎやりや、母乳らひてええイギまぐりらいのほおおおめ、  
牝牛いいい奴隷聖者に魔王様の熱くて逞しいオチ×ポくだひゃいいいいいけ、ケツ  
マ×コずぼずぼしてドロドロ精液で牝牛をザーメンタンクにしてええええ♥♥♥

「ああくれてやろう、そら俺のザーメンで果てろ淫乱聖者!!」

ズバアアアアアアン!! 荒々しく怒張が捻じ込まれ結腸にブチ当たった瞬間に陰囊か  
ら白濁液が駆け上がり、元聖者の肉壺へ溢れかえった。

どつぶうどつぶおおどつぶどぼぼどつぶうううう!!

「牝牛セイじゃいぐう中出しケツアクメしまひゅううびゅうううひいいい♥♥♥」  
濁流じみた灼熱を注がれながら花芯からはミルクを漏らす。ただの肉筒になった錯覚を  
してしまい自虐的な愉悦がどこまでも深く渦巻き、ブルブルと体が歓喜で震えてしまう。

ジョボボボボ! ジョボ! ジョボボボボボ!!

滝のような射精ミルクの量に床には甘い水溜りが出来上がり濛々と湯気が立ち上った。

「胸でも鳴き散らせ」

ブシャアアアアアアアアア!!

「んきゅうううう♥ お、おっぱいしゃせいぎぼひ、いぐ、母乳アグメエエエ♥♥♥

♥ いぐいぐいぐういっびえりゆううういっばいいいっぎひゆぎでばかになりゆうううう  
うううう♥♥♥

パンパンに膨らんだ胸に指が喰い込み、釣鐘型の形が歪み過ぎて胸と形容できない形になる。母乳がローターを押し出しながらの母乳噴射。肉壺から雄棒が引き抜かれるとドバドバと精液が逆流していく。

「おおぼおおお……♥ おちりもおっぱいいもきぼひい……おおお……お、ん……おおん……」

連続だった人外責めにととう奴隷メイドは椅子から床へ倒れ込む。剥き出しの尻を蟹股で掲げる態勢になってしまい、魔王の目に薔薇肛門になったアナルが半固形の精液がホイップクリームのようにヒリだされるとのを見られてしまう。

疲労と余韻に包まれた身体は指一本も動かせないが、母乳射精だけはとまらず床へミルク溜りを広げていく。

「おい、へばるな。俺はまだ満足していないぞ」

「っあああ……ほ、うし、ご奉仕……させて、いただきますしゅ……魔王、さまあ」

「すっかり牝牛根性がついたないや牝牛か、その牝牛らしい胸を貸せ」

「ふああっ！」

むずんと巨乳を鷲掴みされて体を引つ張りあげられる。胸の谷間に肉棒を挟み込まれ、オナホでもつかうよう魔王は肉棒を上下に抜きはじめた。

「ふああっ、あ、ま、魔王様の逞しいおち×ぽさまあ♥ あ、あつくて私のおっぱい、とけちゃいそうです……はあ……ビクビクしてるの、すごく伝わってきますう♥ うああっ、血管のビクビクが、あ、あ♥ 私のおっぱい叩いてるう、はあああ♥」

「人類を絶滅させた敵の逸物で胸を弄ばれる気分はどうだ」

「くやしい、悔しくなきやらめなのにい……らめええ、きもちいれひゅう、魔王さまにご奉仕するの、頭もおっぱいもオチ×チ×もどろどろになるぐらいきもちよしゆぎへえらめえええ♥」

魔王の手が乳房から大きく勃起している乳首へターゲットを変えた。千切れそうなほど引つ張られながら乳首を上下に動かされ、痛みと快感が交互にブランの心臓を打ち抜いた。乳首が引つ張られるたびに、股間からは濃厚なミルクが溢れスカートに染みを作り、床へ乳白色の水溜りを広げている。

「んひい♥ 乳首ひっぱらてイク♥ いっひやいまひゅううオチ×ポミルクビュービュー

ーだしまひゅ♡

「神々もとんだ人選ミスをしたものよ、こんな変態を人類最後の希望にしたのだから」

「あっああ♡」

段々と魔王の上下する手が激しくなり、再び乳房をひしゃげるほど掴んで乳首を肉棒へ擦り付けながら自ら腰を打ち付ける。

ぐぶじゅ、ぶじゅ、ぬちゅ、ぐつぶ。大量の母乳が乳射精され胸の谷間は雄槍ごとミルク色に染まり、ニチヨニチヨと湿った音がひっきりなしに聞こえてくる。

「ま、魔王さまの逞しいオチ×ポさまあ、ま、またおつきくなつてすっごくビクビクしてまひゅ♡♡♡ あっあつ、だすんですね♡ いっぱい私にかけてください♡♡♡」

どつぶ、どつぶりゆるるうるどつぶうう!!

谷間から精液が噴き上がり、ブランの顔へ白濁が直撃する。鼻腔一杯に牡臭さが充満しブランの吐いた息もイカ臭くなる。

「胸を両手で持ち上げる」

肉棒を引き抜いた魔王に言われるがまま、ブランは両手で胸を押し上げる。すると、胸の谷間に精液の水溜まりが出来上がった。

「谷間の精液を舌で掬って飲み、卑猥に音をたててな」

「は、はい……んちゅ、ぺろズゾゾッ！」

ブランの大きな胸は押し上げれば、容易に舌が谷間へ伸びた。ピチャピチャと音が数分鳴りつづけ、次第に谷間の白濁水溜りは底が見えてくるが、魔王が亀頭を谷間へ数回押しつけ射精した。

「あ、あああ♥魔王様あオチ×ポでグニグニしないでください♥」

どつぶ、どつぶりゅううううっ、ぐぐもった音と一緒に白濁がダラダラと流れ谷間の水溜りをもう一度作りだす。戸惑いながらメイドが主人を見上げれば「飲み」の一言。

「ペロちゅう、ズゾッ！ んちゅぺろぺろ……ン、じゅるる！」

言われるがまま、もう一度、胸の谷間に溜まった精液を舌で飲み干していく。しかしまた、谷間の肌色が見えてくると亀頭を押しつけられ強制追加。

「飲み、下品に音をたてて浅ましくな」

「魔王様の仰せのままに……ずぞおぞお……ずるるう！ んぶ、ぷはっ、あ、またグニグニしないでえ出さないでええンきゃあ♥魔王様のザーメンおっぱいに当たるだけでわらひのオチンポをバキバキになっひやいまひゅう……ペロペロ……あぶう、せ、精液で

窒息しそう……ペロペロ……ジュルルウ！ ゾゾゾ！ ……きゃ！ ま、またあ精液一杯……もうお口のなか、魔王さまでいっぱいらのに……ペロちゅっ、ずぞぞ!!」

舌でどれだけ掬っても、なくなりかける頃に魔王が射精し谷間から零れるほどの精液が追加される。

「怒張が一向に収まらんうえオマエの痴態が俺を興奮させるのが悪い」

身勝手なことを言いながら魔王は亀頭を谷間へ押しつけ、叩きつけるよう吐精してくる。

「んちゅ、ジュルルル！ 魔王様あかけないれえ……んちゅ、ジュルゾゾ！ なくなはらい、せえきなくはらないろお！ ぴちやぴちや」

「ならばどこかに俺の逸物を隠す必要があるか」

魔王の手が、ブランの右乳房を持ち乳頭へ亀頭を擦りつけ押しつけてくる。

「え、あっ!? 魔王様、一体なにを?!」

「オマエの乳袋に俺の逸物を隠しているところだ」

ズブ、ズチュッ！ ぶちゅぶぶっ！ ぶちゅぶちゅぶづっ!!

徐々に亀頭の先端が乳管の中へ侵入しだし、乳輪が沈み竿も沈み、ゆっくりと乳管を掘り乳房を犯し貫いた。いままで玩具を乳管の中へ挿入されたことはあったが男根で貫かれ

たのは初めてだ。胸の中全体が爛れ溶けそうなほど熱く、ジンジンと疼いている。

「お、おご、おっごおおおおほおおおっつほおおおお?! そ、そんなあ?! は、は  
いつひゃあ……」

バチンッ、バッチン！ ビチッ、ビッチュ！ ビッチン！

ピストンの度に母乳が溢れ、犯す熱塊を乳液がコーティングしていく。ぬめりと密着性が増しアヌスとはまた違う肉筒の感触に魔王の腰使いもいつそう獣の如く荒々しい。

「おぐうううひぐうううううう♡ い、イイのおおほおっ、お、おっばいレイプうううイ  
ぐうううう♡♡♡ ひ、ひいイあちゅい！」

「どうした？ 飲み干せぬと駄々を捏ねたオマエのために肉棒を隠してやったのだぞ。その牝牛の胸に溜まった俺の子種を飲め、一滴残らず飲み干せ。家畜のよう舌で飲み干せ！」

「はひ、ひいイ♡ ♡ ♡ ずぶ、ぶじゅ、ずるりゆるるうううう！」

命じられるまま奴隷メイドは、揺れる谷間から溢れる精液を啜り柔肌へこびりついた精液を舐めとっていく。

「聖者の面影など全くなしだな。オマエを選んだ神々に見せつけてやりたいほどの淫靡ぶりよ！」

初めてのニップルファックだというのに、手加減なしで魔王は腰を打ち付ける。ブランの肉体が玩具のよう嬲られている。

ぼちゅ、どつぢゅうぐぶぢゅ…ぶぢゅうううう!!

「おっおおっおっぱい串ざしいいいいこ、こんらのむりいいい、こんらぎぼひいいのむりいいいくるっひゃいまひゅうう♥魔王様ああ♥」

「この、淫乱牝牛め。聖者どころか男の面影すらないな」

左の乳を掴みブランの唇へ勃起乳首を捻じ込む。ブランの胸は自分で自分の乳首を舐めさせることも可能であるほど肥大化しきっていた。

「魔王専用の牝牛味だが、今日は特別だ。とくと自分の母乳の味を噛みしめ自分が淫らな乳牛なのをより一層自覚しろ」

「んちゅうじゅるう、ジュルルル!! めひゅれひゅうう、わらひいはあまおうひやまのめすどれいでひゅうジュルル! ジュゾゾ!」

ブランの腔内へミルクが渦巻き、鼻腔にも濃密な甘い匂いが立ち込める。

右では肉棒に小突かれながら、左は自ら過敏な神経の集まった乳首を噛み潰しながら、胸へ淫虐の限りを尽くされ、自分が魔王の牝奴隷になったことが改めて実感でき被虐の快

感に身が震えた。

「まおうひやまあ♥ ジュル！ まおうひやあまああ♥♥♥ もっともつとブランの胸を苛めてくらひやいい胸もお尻もオチ×ポもおおメチャクチャにしてくださいいいジュルルル!!」

「言われずとも」

ズボズボと荒いストロークを繰り出す牡膣を乳房が絞めつける。自ら肉棒を絞めると一段と密着性が増し、肉壁を擦る感触がクリアに伝わってくる。犯されてはじめものの数分で、乳壺も魔王を悦ばずための性欲処理穴へ成り下がってしまった。

「っ出すぞ、牝牛」

ぼっちゅ、どっぶちゅ……どぶん、どっぶん！ ぶっびゅん、どっびゅん!!

「んジュルル！ ギィおごおおほっおほおおおおおお♥♥♥ ンじゅうう……おっばいま×ごおがあああああ、ズゾゾ！ いぐ、いぐいぐうう、まおうひやまの精液でえ♥ 乳ま×ごおアグメぎめまびゅううずうううう♥」

心臓が精液漬けになっているような、内臓に染み渡る熱さに頭が真っ白に染まる。思考も今の状況も吹き飛んでしまいそうだ、胸の内から沸きおこる淫熱の波に身を任せながら

ただ叫びながら身悶える。命令された通りに口に加えた左乳首の母乳に舌鼓するのも忘れない。

「あつふう、おっぱいどんどんおつきくなつてくううう♡ あちゆくええどろどろおお、  
らめええ心臓とけひやううう！ イク、いつへりゆううおっぱいに中出しされてわらひい  
つてまひゆうううう♡♡♡」

射精を受け止める小さな乳袋。人外射精量に右の乳球はどんどん膨らみ左の乳とは比べられないほど大きく丸まっていった。

「鯨の潮吹きにも匹敵するほどの乳噴きになるな」

乳管から肉棒を引き抜き、乳首を摘みながら螺旋状に捩じりあげる。ブランは痛悦に白目を剥きながら、精液と母乳が入り混じった乳射精を派手に打ち上げた。

「あひいいいぐううういぐいぐぐううう♡ おっぱいじゃぜいいいんぶうううごぶ  
つぶううう!?!」

依然と口に咥えたままの左の乳首からも快感に合わせるよう大量の母乳が腔内へブチ撒けられた。喘ぐだけでも大変なブランは息苦しく、嗚咽混じりに喘ぐ。上手く飲み干せない母乳が鼻穴から鼻水と一緒に逆流してくる。

「どれ、俺を満足させた褒美をやろう。受け取れ！」

ズブ、ズグヂュウウウウ!! 胸で体を持ち上げられ、真っ直ぐにスカートごと尻穴へ怒張が押し込まれた。片方の手に花芯を弄り回される。乳房からの過剰快楽ですら手一握のなに更に快感を上乗せさせられ気持ちいいを通り越して苦行の仕打ちだ。

どつぶどつぶりゆううううう!! 陰茎からも母乳精液が大量に吐き出され、尻壺も魔王の白濁液で満たされていく。胸も口もミルク色に染まっており、体中から溢れ出す白色に白黒基調だったメイド服が白一色に染まっていく。

「あひいおごっごおおっほっひっ……おおっ……じぬううぶうう……」  
真っ赤な肉体と反対に青白くなる顔色と虚ろな瞳。

このままブランがイキ死にそうなる寸前——ジリリリ！ 机上の時計から、けたたましい音が鳴りやまない。

「む、時間切れか」

「んぶう……」

魔王の動きが止まると同時にブランは気絶してしまふ。

痙攣し白目剥いてイキ狂うブランから肉棒を抜き乳房から手を放つ。

甘い匂いを放つ部屋中のミルクや飛び散った汚れを魔法で拭き取り、ブランの汚れも魔法で綺麗にし、ある程度の疲労も回復させた。死相の見えていたブランの顔は、安らかな眠りに落ちていた表情になった。

そうすると魔王は時計を止めて、ブランを自分の膝で寝かせながら再び書類仕事に戻った。

一  
夜辱、  
光は墮ちて

一刻 狂乱の肛悦初夜

魔物たちが城下町へ攻めてくる。しかし不思議なことに町はもぬけの殻、人間がいない。城へ侵入しても、やはり人の気配はなく何処かへ隠れているのかと探し回っても、兵士一人も見つからない。

しかし王の間へ踏み入れた途端、先導していた魔物の体が真つ二つ。

「魔王ゲベゲグの野望、ここで終わらせてもらおう!!」

そこにいたのは勇者ウィルだった。

勇者ウィル、金髪金眼の青年。勇者に選ばれる前から王宮騎士として国に仕えており、剣術は勿論魔術の腕も強い。彼に殺された魔物は数え切れない。

しかし城どころか町を埋め尽くすほどの魔物の軍勢に対して、たった一人で挑んできたのは愚かだと、魔物たちはせせら笑い、何も考えずに襲い掛かる。

「———— 睨よ、廻れ」

詠唱と共に眩い聖なる光が、瞬く間に城中を包み込んでいく。闇の化身である魔物たちは、光に包まれると霧散していった。

「成る程、これが光の勇者の実力か」

「魔王……!!」

現れたのは漆黒の存在。牡牛の角と裂けた口以外は何もないつるりとした異形の顔。屈強な肉体は鉄よりも硬くあらゆる武器を弾き、巨体に見合った圧倒的な力を持ち、さらにはあらゆる魔術を使いこなす。

魔物を一掃した光魔術を受けたはずなのに、ゲベゲグに外傷は一切なかった。

「やはり雑魚とは違うわけか」

「しかし悪くない腕だったぞ。勇者ウィルよ、部下たちから話には聞いていたが、出逢えて我は貴様を気に入ったぞ。その身の程知らずな不遜な自信、女と遜色ない麗しい身目になにより——劣情を煽るデカ尻もな」

「気色悪い……」

デカ尻——ウィルにとって尻の大きさはコンプレックスだからだ。

ウィルは平均的な二十代青年に比べると大男の美丈夫で、さらに無駄のない筋肉で引き締まった身体を持っていた。誰もが思い浮かべる男らしい体つきをしていたが、唯一、尻だけ、ヒップだけがやたらと大きく丸い。鍛えられているので肥満でついた贅肉というわけでもない。それでも引き締まった肉体とは正反対な、大きな尻はウィルのコンプレックスであった。

「勇者ウィル、オマエは魔王軍の将来の要だ。このまま大人しく降伏してもらおうぞ」

「貴様はここで倒す」

「ふふ、それはどうだろうな。これを見ても、強気でいられるか？」

魔王がマントを翻すと、この場に人が増えた。

「姫様?! どうしてここに、三日前にお逃げになったはずでは!？」

「勇者様……」

魔王の傍に逃げたはずの、この国の姫が震えながら立っていた。姫は縄に縛られ、首筋に魔王の爪が軽く刺さっている。

「今後この国を治めるならば、この国の姫を妃として迎えるべきであろう？」

「ふざけるな!」

「おっと、勇者殿が魔術を放つよりも、我が姫を殺す方が確実に早いぞ？」

「ぐっ……」

「ウィル、いけません！ 国の未来のため、私を殺してでも勇者の本懐を成し遂げるので

す！」

「……しかし……！」

「勇者様!!」

勇者は膝をつく。姫は騎士の頃から仕えていた存在であり、ウィルの幼馴染でもあった。

「さすが勇者、正しい者だ！ そう判断すると思っただぞハハハッ!!」

「……………」

「さて、姫の命は我が手中にあるのはわかっているな？」

「……………ああ」

（なんとか隙をみて、姫様を助け出し、魔王を殺す！）

「一つ、姫の命を護る条件のために言うことを聞いてもらおうか」

「……………くそ」

悪態を吐くが声に力はなかった。姫を助け出す隙を見つけ出すためにも、魔王のどんな

命令も聞くしかないのだ。

「条件とは、なんだ」

「長きに渡る遠征でさすがの我も疲労が溜まっていてな。ククク……貴様に癒してもらおうか、その牝牛のようなデカ尻でな」

・  
・  
・  
・  
・

(なぜこんなことをしなければ……)

ベッドの上で土下座姿勢のまま勇者ウィルは唇をかむ。

ここは本来なら王の寝室、いまから魔王と閨を迎える場所。

魔王ゲベゲグが風呂で身を清めている間、頭を下げて待っているら命令され、姫を人質にされている 従うしかなかった。

(それにこの恰好……魔王ゲめ、俺を弄んでいるな……)

ウィルはいま、勇者の鎧を脱ぎ砂漠の踊り子のような衣装だった。

式刻 真夜中の牝尻絶頂

「……………っ、う……………?! な、一体これはなんだ!？」

ウィルが今夜二度目の気絶から目を覚ますと、また態勢が変わっていた。

仰向けのまま、今度は肘と膝を紐で結ばれ、尻孔を天井目掛けた格好……………まんぐり返しの状態になっている。

「ああ、起きたか。これからオマエの身を清めてやろうとしていたところだ」

「……………どういう意味だ」

「言葉の意味、そのままだ」

魔王ゲベグが見せつけてきたのは、片手で持てるサイズの器具。

毛虫を串刺しにしてモップとして使っているような悪趣味な見た目で、うねうねと勝手に動いているので、毛の生えている触手でつくられているのだろう。

「そ、それ、で、俺の身を清める? 拷問の間違いだろう……………」

「ほお? 悪態をつくわりにはオマエの花弁はひくひくと物欲しげだが?」

緩んだままの窄みを指の腹で撫でられる。軽やかな媚電流に思わず身震いしてしまった。

「ち、ちつがああつほおおおつごおおおおおおおお♡♡♡♡」

ズポオオオオオ〜！ アナルへ触手モツプが挿入される。精液塗れの腸壁を繊毛で引っ

搔かれるような、撫でられるような、絶妙な匙加減に蕩ける感覚が尻孔へ渦卷いた。

「おおおおつほおおおおほっひイイイイイイインっうう、う、おおおおおつ♡」

（ら、らんっらこっこれはあああああ?! ま、魔王のチ×ポ、とは、ちがうつがアああああ♡

ま、また、イク、イクのが、とめらつれええええんっほおおおおおおおお♡♡♡♡）

ズポっつおおおお〜。ズッぶうううっぼっツポオオオオ〜。

ズブッブヂュウウウウウウズポオオオオ〜！

体の自由が効かないまま直腸を磨かれながら、器具はどんどん深く沈んでいき 柔軟に曲がりくねって結腸まで辿り着く。

「牝の快楽に目覚める者が見せる表情は、いつ見ても愉快的な光景よな」

「おーっ♡ オーっ♡ オーツ♡」

じんわりと汗を浮かばせ、息をするしかできない。腹の深くへズーンと響く圧迫感と腸壁への快刺激に、花芯が反応しているのが嫌らしくて、悔しい。

魔王の手がとまった間に呼吸を整え、腹を襲う感覚に慣れようとするが、それより少しだけ早く魔王が玩具のグリップを左に回した。

ボコン。ボコン。

「うんオ?!」

触手玩具が腸内で左に回りながら変形していく。その刺激にすら瞼の裏に星屑が飛び散るような衝撃で、何度も、何度も頭が真っ白になる。

ボコン。ボコン。

触手モップが大小不揃いなアナルビーズへ変形していく。ツルリとした玉は繊毛とはまら違う感触を尻壺に与えてきた。腹痛混じりの圧迫感が凄まじい。

「そら、引っ張りだすぞ」

「おおおおおっごおおおおおお!!」

眉を潜めたウィルの表情が困惑する。

一個目の玉が肛門皺を巻き込みながらゆっくりと引き抜かれてくと、玉の大きさに比例した苦しさ、そのウン十倍にも肥大化した排泄快楽へ反転したのだ。

ずぼおお……ずりゆううう……ずつるううう……ズりゅんっ!!



ぶぢゅっぶぶっばおおお〜!!

下品な音を盛大に鳴らしながら、何かがアナルビーズ排泄と共に抜け落ちていく。自意識もぐちゃぐちゃに掻き混ぜられながら抜け落ちていく。

ズッポオオオ〜!!

「——オ、おおっごっひふっひイイイイイイツツ♡ ら、らんっでええええええ?! ま、まっだはいっでっぐりゅっごほオおおお、おおおおお、いぐ、いっぐ、いっぐううううううううううう♡♡♡」

最後の玉が抜け切る直前、魔王がアナルビーズを押し込めてくる。不揃いな玉が先ほどのブラシ棒よりもやや荒っぽく挿入されていく。前立腺が圧迫され、気が狂わんばかりに叫び肌を真っ赤にさせながら汗を浮かばせ、爪先を丸める。

シヤラン、シヤラン、シヤラン!!

そのくせ不自由なはずの、肢体は飛び跳ねてアクセサリーの金具が、宝石が、揺れる。

「お、おおおっ♡ おーっ♡ おーっ♡ おっっっ♡♡♡」

ずぶぢゅん。ごりごぢゅごっちゅ♡ ずぶぢゅん。ごりごぢゅごっちゅ♡

ずぶぢゅん。ごりごぢゅごっちゅ♡ ずぶぢゅん。ごりごぢゅごっちゅ♡





グル、ギュッグルルルウルル……。散々玩具に弄ばれ、またアナルビーズを詰め込まれた排泄器官が限界だと不吉な音が響きだす。

加えて魔王の手が器具から離れた。ただニヤニヤと見下ろしてくるだけだ。

(あ、あ……ああああ……!!)

ギュルルル!! 排泄器官が蠢き、精神とは別に体が括約筋に力を入れてしまう。

ぶびィ!! ぶびィ!! ぶびィ、ぶびィピィピィ!!

自力で器具をヒリだそうとするせい、か、精液、ガス、器具の三種の音が混ざり合い下品な合唱を奏でてしまう。

(だめ、だめだめだァァァァ!!)

先程までは魔王に罵られていたからどんな痴態を晒そうとも「魔王のせい」だと心の中で言い訳できた。自分でして、自分で痴態を晒してしまえばその言い訳は通用しなくなる。

「つふううう、ふつぐうううう!!」

必死で力む。腸鳴りとともに激しい腹痛が襲ってくるが堪える。散々魔王に弄ばれたアナルは今や敏感な性器へ成り下がっている。恥の上塗りをするわけにはいかないのだ。

「ふつぐひつぎ……んふうううう!! つふううううう!!」

「やれやれ」

魔王が溜息をつき、パチン!! と勇者の尻を一叩き。

軽めの痛みだったが便意で頭が回らないウィルには、集中を掻き乱すには十分な威力だった。

「お、おおっご、お、あ、ああっひいいひいいひいいひいいひいいひ!!」

(ら、らめ、らめっらっろに、でる、でってひまううううう!!)

ぶっりゆ、ずっりゆん!! ずっりゆっりゆん!! ブビイ!! ずっりゆん ずりゆりゆんりゆんりゆん!!

尻が真上をむいているので重力に些か抵抗されながら、それでも勢いよく大小不揃いなアナルビーズが、飛び出てくる。肛門からマグマのような激しい淫熱が噴火しつづける。

「おおおおおおおおおおおおおおひひひひひひひひひひ——♥♥♥」  
ずりゆん!! 最後の玉が抜け切る。

グギユルルウル…:ギユルルルウウウウウウ!!

同時に手が届かないほど腹の奥から猛烈な痛みが押し寄せてきた。緩みに緩み切った排泄器官から、何かが競りあがってくる。

力もうにも、桃色と白濁色のアナルはぽっかり開いたまま。肛門皺がピタリと閉じる気配が一切ない。

「ハアハアアアアア?! いや、いやっらアああああ…みるら、みりゅっらアあああああああああ、あ、あっひっひイイイイイイイ、お、おとおおとおお、おごッ♡♡♡」

ぶり♡ ♫ぶっぶりゅぶっ♡ ♫ぶぼぼぼぼぼぼっぼぼ♡♡ ♫ぶりぶりぶりりりイイイイイイイッッッブボボボボッボボッオオオオオオ♡♡♡  
水分が抜け切った白濁の塊が菊皺を盛り上げながらムリムリと排泄される。白濁の塊は途切れ、途切れ、ポトポト、下腹部へ落ちてくる。

アナルピース排泄をこえる、排泄アクメに爪先が丸まる。

ブ、ぶつぶぶ、ブピィ!! ブピィ!! ブッピィイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イ!!

「お、おとおおっひいイイイイイイイッくううううううううううう  
♡♡♡」

最後に盛大な艶咆哮と屁放で肛門騷りは一先ず終了した。

参刻 明けぬ淫獄、永遠の淫夜

「頼りの勇者の正体がこんなマゾ牝変態でさぞかし、姫様も残念でしょうなあ？」

「え、あ……………なにを急……………」

ゲベゲグの顔が動いたのにあわせてウィルも視線を動かした。

部屋の扉の前、姫が立っている。

一体いつから立っていたのか、無表情のまま真つすぐに此方を見ていた。

「あ、あああ、ああ、ああああああああ……………」

勇者ウィルは真つ青になり、尻孔からザーメンを垂らしたまま混乱した。どうすればいいのかわからないまま、テーブルの上で蟹股になったまま顔を覆い隠した。

「どれ、せつかくだ姫様にも勇者殿の頑張りを見てもらおうではないか」

「や、やめっろおおおお!!」

六本の腕を持つ魔王に軽々と身体を持ち上げられ強制的に姫と対面させられる。せめてもの抵抗で首を抑えつけてくる腕を引き離そうと藻掻いても力強い魔王の腕はビクともし

ない。

精液塗れで、鈴が巻き付けられている股間が開脚され。頭を強く握られ動きを封じられる嫌でも姫を見下ろす形になる。

「姫様を護るために、我に体を差し出し牝となった勇者の献身……ククク、とくとお披露目してやれ」

「あう……ちが……ちう、のでっすうっふっほおおっ……!!」

肥大化したての乳が大きな指で捏ねられる。それだけで砂糖菓子溶けたような甘美が押し寄せ、思わず身震いすると錘のついたニップリングが跳ね回り乳首へ深い刺激を与えてしまう。

「どうやら水薬の“副作用”で感度も跳ね上がったようだな」

「お、おおおっおっおおお……ア、っひいひいひいひいひいッッッ♥♥♥」

ムギュッ!! ぎぢぎぢ!! 乳首を抓られると媚刺激が心臓事突き刺さる快感が刻み込まれた。背筋が仰け反るほどの激しい乳悦に、さっそくウィルは頭が真っ白になってしまう。

「それとも姫様に見られて興奮しているのか？」

「え、あ……ちがつう……ちがう……」

男勇者の女のじみた言動に対して、姫はただ黙っているだけだ。なんの感情も浮かんでいない双眸がただただ、見上げてくる。

「おやまあ、随分としおらしい。だが……」

「——っ」

ズボ、ズボヂュウウウオオオツツツ!!

「お?! ……お、おっごおおおおおおお~~~~♥♥♥」

真下から杭を刺す勢いで、異形男根が挿入される。十節からなる玉状の竿に肛門が押し広げられ、凶悪な五重の雁首に腸壁を磨かれ、さらに竿には肉眼では見えないほどの小さな刺がいくつも生えており、微量ながらも淫毒を超粘膜へ注射しながら痛悦を与えてくる。

ボコン!! 一気に根元までの挿入で結腸まで犯され、腹が真ん丸に膨らむ。

「お……おっひ♥」

圧迫感と壮絶な快楽にびくびくと瞼が痙攣をおこす。

ぶちゅ、ぶっぼっぶちゅうううううう。

直腸蜜が噴き零れる。首を抑えつけてくる腕に抵抗していた指が、だらりと垂れ下がる。

「ククク。いまのオマエ、牝の顔だぞ」

「っほ……おお、っふうううっふんぢゅううう？」

ゲベゲグに頬を掴まれたまま唇が重なる。

姫の眼前で宿敵とのキス。異形怒張の挿入に全てを削がれ、拒否する気力も湧かずされるがまま。

「んっふううう、あっふ……あ」

舌で唾内中を愛撫されながら、さらに髪を優しく手櫛で撫でられる行為に思わず夢中になってしまい唇が離れて、ようやく姫が見ていることを思い出した。

「そら、姫様に牝としてのオマエを見せてみる!!」

ズッポオオオオオ!! ぐぼぐぼおおおお!!

ズッツッポオオオオオ!! ぐぼぐつぼぼおおお!!

獐猛なピストンに腹が突き上げられかと思えば、菊皺がスライムのような限界まで引つ張られる。超粘膜を泡立つほど掻き混ぜられながらのストロークをされながら、ゴリゴリつと前立腺が肉壁越しにもみくちやに押しつぶされ、毒針を射される。

「お♥ おっほっごおんほおお♥ は、はげっぢ♥ ンッヒイイイイイ♥♥♥♥♥」

(しゃ、しゃっぎろっつと、ぜ、ぜん、ひがっひゅううううううううう♥♥♥♥♥)

ちりん、ちりん。

シャラン、シャラン。

花芯に巻きつかれた鈴と、踊り子のアクセサリーが同時に激しく鳴り響く。

「牝のような惚け顔だな、ほれ、姫様がみているぞ」

「ひ、ひっひゃあああああああああ♥♥♥」

「……………」

異形の牡棒に蹂躪される自分の痴態を、一言も発しないまま見続けてくる姫の視線に心を折られる。いつそ罵倒の一つでも吐いてくれれば、いいものを姫はただただ冷えた双眸を向けてくるだけ。

「姫の前で魔王に屈服する気分はどうだ？ 牝勇者にはさぞや気持ちがいいのではないか？」

「ち、つつが♥ アああちつがうんれっひゅうう♥ ひめひゃまっらああ♥」

「ククク、何が違うのだ？」

ズン!! ズッポオオオオズユウウウウウウウ!!

「オッ……!! ツツツツツゴオオオオオツツ♥♥♥」



!! ぶっびゅっぶぶっぶっばおおおおおぶっびゆるうううううぶっばおおお  
おおお~~~~!!

「っ、っ、ツツツ~~~~!! ツ、ン、ンッオ、ほ、オおおっおっひっいいいい  
イイイ———ツ♥♥♥」

(こ、こっれ~~~~!! あ、あだま、やげっりゅ♥ まっしろになっりゅう♥ ぎ、ぎも、  
ぢよぢゆぎっりゅううううううううう♥ ンっほおおおおおおおおおお♥♥♥)

今宵二度目の腸壺射精。

淫毒で爛れた熱さ排泄器官全体がぶり返し渦巻いていく。ギン!! と背筋と首が仰け反りかえった。金の瞳が瞼の裏に隠れてしまい、口角は歪んだ笑みを浮かべる。

どぼっぼっぶっぶっぶりゅっりゅっりゅっ!! ぶっぶどぼっぶっぶどっぶぶ  
っりゅっりゅっ!! どっぶぶっびゅぶうううううぼぼっぶっぶっぶりゅっりゅ  
ぶぶりゅぶっりゅぶっりゅ……!!

「め、めっひゅうう、めっひゅれっひゅううう!! めひゅっりらっりゅ!! らっりゅっ  
がらああどめっべでえええ、ぬいでくだっひゃあ、あ……んっぶうう?!」

壮絶な射精アクメに恐怖心すら抱き、魔王に懇願すらしてしまう。しかしゲベゲは勝







ううどっぴゅうううううどぼっぽおおどっぴゅっぶううどっぴゆるるっ  
りゅっるん!! どっぴゅっぶっぶっぴゅりゅるるるるるるん!! どっぽっぶぶりゅ  
ぶりゅぶぢゅうぢゅぢゅぢゅっぶるるるるぶうううどっぴゅううううどっぽ  
っぽっぽおおどっぴゅっぶうううどっぴゆるるる!! ぶ、ぶ、っぶっっぶっぶっび  
ゅりゅるるるるるるるるるるるるるるるる!!

「おっきおっきよっひよおほっほおおっっふううういぎいっきゅぐっきよおおおお  
おお、おおおおおっ……♡ おーっ♡ おーっ♡ お、おっーお♡ ……おっーお♡ ……  
…おっーお♡ —————♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡—————♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡……

♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡……………♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡—————♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡……  
—————♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡—————

ゲベゲの宣言通り一日かけて魔物の卵を産み潰けられ、一度明けた空はとっぷりとま  
た闇夜に戻った頃に魔王と勇者の産卵交尾は終わった。

「フフフ、我が牝奴隷ウィルよ。共に魔族の繁栄のため人間どもを滅ぼそうではないか」  
「……………っ♡」

昨夜からの蹂躪がようやく終わったが、金髪から爪先までのすべてが白濁に穢され、金の双眸にもすでに正気の光はなく、ぼつてりと膨らん胎を牝の顔して茫然と眺めていた。

・  
・  
・  
・  
・

ウィルが堕ち、魔王の子を孕んでから一月の時間が流れた。

依然、魔王ゲベゲグに囚われており逃げることも、戦うこともできずにいる。

「んぶ、んぢゅつるつううううっ!! ふっぐ ふっぐ あっふううううう ♡♡♡」

ビクビクッ!! ビクビクッ!!

ビクン!! ビクン!!

ビクビクッ!! ビクビクッ!!

跳ねる身体はしかし、上手く動かせない。

ウィルの体は巨大な肉塊埋まっており、触手により休むことなく嬲られつづけている。

### 【憩いのひととき】

「おっぱい書きたい!!! おっぱい! おっぱい!」という欲求のみで書いた書き下ろしです。楽しかった!!! 魔王はメイド聖者に惚の字という設定で書いたんですけど「あれ? なんか鬼畜具合すごくない?」ってなりました。おっぱいも雄っぱいも最高、好きです。

——「寵愛Ⅰ 魔の花嫁へ堕ちる者」より

### 【蜂蜜寵姫】

大きな体格の責めに抱き潰されるのも大好きですが、自分よりも小さい相手にしがみつかれてズボズボされるのも好きです。余談ですが、蜂について調べる際に「蜂 幼虫」とグーグルで検索かけたら幼虫の画像がトップに出て来てサブイボたちました。

今回各タイトルに寵姫が多いのは私がこの単語好きだからです。

——「寵愛Ⅱ 苗床寵姫」より

### 【一夜辱、光は堕ちて】

タイトル読みは「いち-や-じゅく」です。ムダに凝ったタイトルがいいー!!!という理由でつくった造語です。

話しの内容は魔王×勇者と産卵と排泄と……と色々性癖をブチ込んで作りました。姫様とウィルがNTRっぽいですが、個人的にはNTRとは思っていないのでNTRではないです。

この後ウィルは不老不死の魔術を魔族語で肌に刻まれて、長い時間、魔王ゲベゲグの牝奴隷としてたくさんの魔物を孕んで産む人生が待っていますが本人はそれで幸福なので問題ないです。

——「寵愛Ⅰ・Ⅱ再録—悦楽収集本—」より

# かきおろし再録短編集

2021年 4月20日 DL

著者・編集 カルビ

制作 焼肉文庫

発行元 buekbe2@gmail.com(Mail)

かるび@ACND64RH63(Twitter)

カルビ・12050686(pixiv)

## 掲載一覧

憩いのひととき	寵愛 I 魔の花嫁へ堕ちる者	書下ろし
蜂蜜寵姫	寵愛 II 苗床寵姫	書下ろし
一夜辱、光は堕ちて	寵愛 I II再録・悦楽収集本	書下ろし

## 注意

本書は成人向けです。18歳未満の方の目に触れないよう、  
お願いいたします。無断転載・複製・複写・インターネット上  
への掲載は禁止です。